

f c t

GAZETTE

1987・2

vol.6

Number・24

ガゼットは
テレビと市民
のデータバンクです

編集・発行／子どものテレビの会（F C T）神奈川県葉山町長柄1601-27 責任者／鈴木みどり

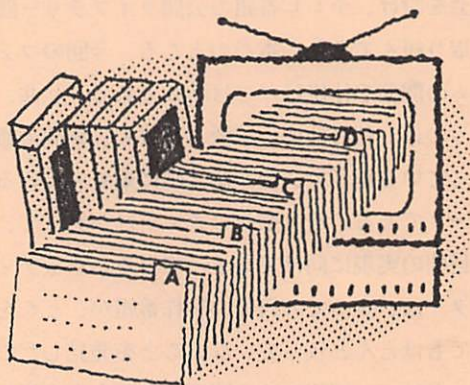
銀行口座 第一勧業銀行返子支店（普通預金口座 1425785） 郵便振替口座 東京9-84097

購読料／年間（4回発行） ¥1,500円（送料¥240） 一部¥400

■特集1

テレビ番組公開ライブラリーの 実現を目指して

後藤和彦（常磐大学）



10月8、9の両日、東京で「国際ビデオライブラリーフォーラム」が開かれた。主催はNHKと民放の両者が共同で責任をもっている唯一の財団法人である放送番組センターで、8日は放送関係者だけの専門家会議、9日は公開のシンポジウムであった。趣旨はテレビ番組を保存し、活用できる公共施設をつくらう、というもので、国内15局の関係者、それにイギリス、アメリカ、イタリアなどの放送局のライブラリー、また、放送局の外の公共ライブラリーの現場責任者や制作者たちが専門家として参加した。

実はヨーロッパの放送機関を中心に「国際映像ライブラリー機構（F I A T）」とよばれる共同組織が1977年に設立されている。このF I A Tの大会がカナダで開かれたのを機に、主要関係者を招いてフォーラムを行ったのである。F I A Tは番組ライブラリーの現場の責任者の機構で、テレビ番組のライブラリーの整備、保存、相互利用、共同研究の促進を目的としている。この種の機構は日本にはまだないし、目下のところ大阪のA B Cだけがこの機構に加入している。今回の催しもA B Cの原清会長の発意で実現したものである。

■CONTENTS■

- 特集1 テレビ番組公開ライブラリーの
実現を目指して……………1
- 特集2 F C T 10周年を迎えるにあたって
「大きな流れに抗して」……………4
- F C T 9周年記念フォーラム記録
思春期症候群とテレビ……………6

- F C T 井戸端会議 新シーズンの番組拝見…9
- F C T データバンク
国内篇……………11

イラスト 市川雅美

放送局の外からみていると、当然やられているであろうことが実は放送局ではやられていない、ということが多々ある。その一つが番組の保存ということで、局内ライブラリーの整備が本気で行われるようになったのは、比較的最近のことである。本気で番組の保存を局全体の問題として取り組むという姿勢は、そう以前からあったわけではないのである。

なぜテレビ番組の公開ライブラリーか

実は私共、4年ほど前から放送文化財保存問題研究会を設け、テレビ番組の公開ライブラリー問題に取り組んできた。本当のところ、今回のフォーラムの開催を仕掛けたのは私共である。私共、というのは、私の他に、民放、NHK、新聞に職をもっている数名で、全く個人的に集まっているグループである。それぞれのきっかけがあって、同じ目的の実現に向けて集まっている。あるディレクターは、かつての自分の制作番組が、どこを探してもほとんど残っていないことを発見したのがきっかけで、同僚にこの問題への関心を喚起し続けている。ある人はテレビ30年の取材で、あちこち局を回ってみて、テレビの発達史上欠かせないはずの番組のほとんどが残されていないことが分かり、そこから運動に乗り出した。ある研究者は昭和30年代のテレビドラマの研究会を始めて、やればやるほど肝心の番組が保存されていないために、実物を見ながらの研究が出来ないことが分ってきた。それに放送局外の研究者、いや一般の視聴者の場合ならなおさらのことだが、そういう立場の人とは、すでに放送された番組をいま一度みたいと思っても、あるいは見損った番組を是非みたいと思っても、まずみることは出来ないのが実情である。既に放送された番組への視聴者のアクセスのみは用意されていないのである。

私共の基本的考えはつぎのようなことである。テレビ番組は、内容のよし悪しを問わず、現代という時代の表現であり記録である。テレビ以前の時代には、こうした時代の表現の記録・保存は、図書館というかたちで行われ公開されてきた。図

書館は、少なくとも印刷物のかたちをとった表現、記録をできるだけ多く収集し、保存し、公開して同時代の人と、後世代の人とにアクセスの場を用意してきた。テレビがスタートしてすでに30年以上を経過している。われわれの時代は、本気でテレビ番組のライブラリーを考えるべきところに来ているのではないだろうか。

この考えはさらにテレビが公共の所有にかかわる電波を使用している事実にも根ざしている。公共の電波を使用して公表（パブリッシュ）されたものに対しては、市民はアクセスの権利をもって当然ではないか、と私共は考えるのである。

テレビの初期にはテレビ番組を記録する手段がなかった。テレビの画面をフィルムに撮るキネコという手段が辛うじてあったが、これはいかにも画質的に不十分のもので、本格的な保存の手段とはいえない。テレビの初期はすべて番組はナマ放送で行われていたので、まず、記録として残っていない。全部、「送りっ放し」で消え去ってしまっている。

その後、VTRが導入された。しかし、VTRはいまでは想像もつかないほど高価なものであったので、ごく少い本数のテープを、限られた番組について使用が許されたが、放送後、直ちにそれらは消されて、つぎの番組の収録に回わされた。従って、このVTR初期も番組は残っていない。

番組がかなり残りうるようになったのは、VTRが日常的に使えるようになってからのことである。しかし、物理的に残せるようになったからといって、どんどん番組が残ったかということ、そんなことはない。いかに放送局といえども、そう簡単に番組を残すことはできないのである。それは著作権上の問題のためである。著作者の立場からいけば、放送局が勝手に番組を保存しておいて、随時、それを再放送、再々放送されたのでは、著作者としての権利を損われてしまう。法律上、放送局は原則として番組をいつまでも残せない仕組みになっている。どうしても残そうということになると、公的記録保存所という制度に移して、文化庁の監督下に置かなければならない。そうやっ

て公けの保存所に入れた — といっても物理的にはNHK、民放各局で保存しているのだが — ものは、勝手に取り出して放送することはできないのであり、是非とも放送したければ、公的な保存から外して、改めて全著作権の権利をクリアしなければならない。

これはいかにも面倒くさいし、ややこしいことなのだが、こうまでしておかなくては、著作権者の権利はいつでも簡単に侵害される、というのが事実なのである。それにしてもライブラリーの実現と著作権問題との関係の処理は極めて難しい。

実 現 へ の み ち

世界的にみて、私共が求めているような公開のテレビ番組ライブラリーはほとんどない。実はミニモデルが一つある。それはニューヨークの「ミュージアム・オブ・ブロードカスティング」、放送博物館である。ミュージアムなのだが、放送機器の展示があるわけではない。ここにあるのは番組である。ラジオもテープがあることはあるが、主体はテレビ番組で、ネットワーク側で著作権者の権利処理をして収められたものがきちんと分類され多様な検索で取り出せるようになっている。ここは公開なのでだれでも入って、自分みたい番組を個人的にみることができる。何人かで一緒にみることもできるし、やや多数の人々のためのオーディトリウムもある。ただ、全体としては小じんまりとしたライブラリーである。このライブラリーはCBSのW・ベイリー元会長が、個人的に基金を出してつくったものである。

だれでもそこに行けば、自由にストックを調べてみたいものをみるができる。これは図書館と全く同じことをテレビ番組について行うものである。本ではないのでライブラリーというのは本当はおかしい。アーカイブズといってもいい。ことばが問題なのではないので、なんと呼んでもいい。要は、テレビ番組についても、公共図書館と同じ機能をもったものをつくってほしい、ということなのである。

こうした私共の要求に対して、ようやく放送業

界も対応を始めた。私共は実際に放送局にどの程度の番組が残されているのか、この種のライブラリーをつくる上の制度上の問題は何か、制度以外の問題は何か、等々について調査をくり返してきた。そうした調査の一方で、いろんな分野の人々に私共の考えをぶつけてみた。政治家も役人も私共のターゲットであった。こうしていろんな人々がいろんなかたちでライブラリー問題に関わるようになってきた。これでひともうけできないか、と早合点した人もいる。これで産業振興につながる、と強引に解釈した役人もいる。これがCATVのソフト源になる、と短絡した人たちも多い。図書館で金もうけをした人の話など、あるはずがない。これは文化の問題なのである。ともかく、郵政省も検討を始めようとしている。放送業界は放送番組センターにこのライブラリー機能をもたせる方向での本格的検討を行っている。

公開のテレビ番組ライブラリーができるためには、その前に放送局がきちんとしたライブラリー体制をもつ必要がある。放送局は放送局として番組の保存、再利用の必要があるので、特定の価値基準でとっておくものはとっておくことになるのだが、公開ライブラリーとの関係を考慮してとっておく、というのはそれとは別の話である。放送局がヨコに協議して、同じようなフォーマットでできるだけたくさんを保存して、将来の公開ライブラリーの実現にそなえてくれるのが望ましいのである。放送業界全体がそうした方向で一致して動き出してくれないことには公開ライブラリーは外でいくら必要性を叫んでも実現はおぼつかない。

他方で、ライブラリーの構想を具体化していくためには、できるだけ多くの人々が考えを出し合う必要がある。構想をつくること自体、可能な限りの公開性をもたせなくてはならない。実際のところ、こうしたライブラリーを実現し運用するには多大の経費を必要とする。建設資金、運用資金をどうするのか。権利処理をどうするのか。このあたりが大きなポイントである。FCTのみなさんの意見も是非聞かせて欲しい。

「大きな流れに抗して」市民として出来ることを

— FCT 3年目のこと —

この10月から始まるFCTの新しい年度は、1977年発足から数えてちょうど10年め。市民活動が変貌をとげずに10年続くのはそう多く例のあることではないと言われている。そんななかにあつて、ともかくも発足当時と同じ方針を貫いて活動を続けてきたこの10年をひとくぎりとして、FCTのありようをまとめておくことは、次の10年への手がかりともなるのではないかと考えた。10周年に向けて5回のシリーズで、FCTの軌跡をたどってみたい。

前回、発足1年間の活動状況をかいつまんだまとめを読んで「FCTってはじめから忙しかったんですね」と最近スタッフに加わったAさんは慨嘆していた。毎年「会員通信」に年間活動記録をのせると、「読んでいて目がまわりそう」と言いながら楽しみにして見て下さる会員が何人かいる。いつも忙しいFCTの3年めは現在の活動の柱にもなっているモニター調査、テレビ診断分析調査の基礎が作られた大切な年でもあった。

発足3年めの1979年10月末には、全国各地から会員にと参加した人164名。テレビ関係者、研究者、主婦、学生、と実にさまざまな立場の人たちが年会費4,000円を払って会員登録をした。

ボランティアスタッフ20余名、会計その他煩雑な事務を担当。そして発足当初中心になった鈴木みどり、G・オルソン、高桑康雄、片岡輝、2年めから後藤和彦、久田恵による運営委員会が構成され、FCTの活動方針を決定するというシステムが機能するようになった。

(新聞に掲載された第3回セミナーの報告記事を読み、FCTの活動について興味をもった私は、'79年10月の第4回セミナーに参加。「何であの時あんなに駆りたてられるような思いで出かけたのだろう」といまでも不思議な気がしている。まるで吸いよせられるようにしてFCTに近づき、結果としてほとんどその日から活動に参加することになってしまった。初台の久田宅が仕事をする場所になっていて、うまれたばかりの連君の泣き声を伴奏に、モニター調査のためのガリ版刷りをやった。コピーなんていう便利な存在は縁遠く、イン

クまみれになって“学生運動をやってアジビラを刷っている気分”の仕事は、はてしなくあつた。

小学生の子どもを3人も育てていて、仕事もしていて忙しかった毎日の中で、自らとびこんだとはいえ、わざわざ仕事をふやす結果となつた。

当時私と同じようにして新聞で知り「テレビを何とかしなくては」と積極的に参加してくる人が後をたたなかつた。テレビへの危機感をもって何か出来ることから行動しようと考えている人たちがFCTに「日本で唯一の視聴者としての市民運動」によせる期待は大きくなるばかりだった。

3つのプロジェクトチーム発足

第4回セミナーをきっかけに発足したプロジェクトチームは次のようなものとなつた。

●役割モデルプロジェクト

テレビが子どもに向けてどのような手本(モデル)を提供しているか具体的に明らかにする。

モニター調査を中心に活動。担当 鈴木みどり。

●メディア教育プロジェクト

子どもたちがテレビを積極的に受容するための批判的視聴能力を養う必要がある。そのため何をしていくか可能性を考える。担当 稲泉 清。

●子どもの権利プロジェクト

子どもを権利の主体者としてとらえ、テレビがどのように応えているか、侵しているか。いま子どもの権利を回復するためにテレビに何を求めていくかを考察する。担当 片岡 輝。

三つのプロジェクトチームは各4、5名のグループで構成され、放送文化基金を活動資金として

月に1、2回のペースで連絡会をもち、活動を開始した。

3つのプロジェクトチームの中で最もめざましく忙しかったのは役割モデルプロジェクトだった。

1979年2月には第1回モニター調査を実施。全国から80名余りの参加者を得てホームドラマを視聴し、4月末には「子ども向けホームドラマにみるステレオタイプ」と題した22頁の報告書にまとめた。6月には子ども向けのアニメーション番組のモニター調査を実施し、12月末には「子ども向けアニメーション番組に見られる価値観」と題した44頁の報告書を発行。79年末から80年初頭にかけては、より本格的なテレビ診断分析調査の準備のために竹内郁郎、村松泰子などアドバイザーを訪問して助言を求め、FCT独自のチェックシートを開発をすすめた。

子どもの権利プロジェクトはフォーラムを担当するというかたちで半田たつ子（当時雑誌「家庭科教育」編集長）大越睦助（文化放送制作局）を報告者としたオープンフォーラムを開催。以後継続してシンポジウムなどを企画。

メディア教育プロジェクトは'79年1月にフォーラムを担当。大森哲夫（成城学園教諭）による映像教育の実践活動報告を通して、FCT独自のメディア教育カリキュラムづくりの研究に着手。最近になってやっと理解が得られるようになったメディア教育の必要性をいち早く提唱したという意味では先駆的役割をはたすことになった。

2周年シンポジウム盛大に

FCTの活動のもう一つの柱であるフォーラムは、毎月第1土曜日に市ヶ谷ルーテルセンターでオープンフォーラムとして開かれていた。各プロジェクトチームがそれぞれのプログラムに従って交代でテーマを設定し、主催するという形式をとった。その他、'79年3月のフォーラムは放送文化基金助成を得た委託研究により永野重史（国立教育研究所）、高桑康雄（名古屋大学）、無藤隆（東大新聞研）— いずれも当時の役職 — 他の発表者を得て「テレビCMが子どもに与える影響と

その克服」を報告。後にこれは報告書としてまとめて発行された。

また、12月8日にはFCT2周年記念シンポジウム「子どものテレビの新しい行動原理」をテーマに奥平康弘FCT専門委員が記念講演。「大きな流れに抗して」と題して、情報化社会の中では誰もが自分の判断で真実を選択する目と勇気をもたなくてはいけない、と力強い調子で記念講演し、参加者に刺激を与えた。この講演のあと3つの分科会に分かれて70名近い参加者が、「子どもの権利とテレビ」「子どもCMに新しい視点を」「市民による放送局の可能性」について話しあった。

当日の参加者が後日FCTに寄せた感想をひろってみると、「一年前と違って組織も大きくなり当初にあった広い視野が整理され具体的になっているだけにせまくなっているのでは…」（斉藤勝男）、「電波を市民のものにすることは日本ではむずかしいことだと思っていましたが、私たちがテレビ局に積極的にアクセスしていくことで可能性を開くことが出来るのだという希望をもつことが出来ました。」（一言ゆう子）、他多くの感想が寄せられた。

午前10時から午後5時30分迄の長い、しかし内容の濃いシンポジウムとなった。

FCTは市民グループと自称して、従来のピラミッド型の団体構造をもたないまま発足した。対外的な便宜上代表というポストはあったが、発足から数年は運営委員会を意志決定機関として民主的な運営を心がけてきた。誰もが仕事を分担し、責任をもち、それぞれの場で機能するという構造は、一つまちがえばまとまりを失い拡散してしまう危険もはらんでいた。発足当初の数年間、市民グループというものの存続の最も危い時期に、理論的な話しあいを深めれば危機に陥った筈だ。幸か不幸か、活動体としての体質を考えている暇もないくらいとりあえずやらなくてはならない仕事に追われ続けてしまった。多分このことはFCTのその後にとって幸せだったといえるのだろう。

（文中敬称略、まとめ・竹内希衣子）

思春期症候群とテレビ

— 批判的視聴能力をどう養うか —

報告者 鈴木裕也, 内科医 (社会保険埼玉中央病院)
児玉澄子, 高校教諭・カウンセラー, 鈴木みどり, F C T

10代の子どもたちは今日、テレビの商業主義のターゲットになっている。彼らはその結果、日常生活でどんな影響を受けているのか。“思春期症候群”と呼べるようなさまざまな症状について学び、さらに10代の子どもをテレビの力に対抗できる人間に育てるために私たちに何ができるかを話し合うため、スピーカーに内科医で『彼女たちはなぜ拒食や多食に走る』の著者・鈴木裕也さんと都立高校の先生で『若いいのちの像』の著者・児玉澄子さんのお二人を迎え、F C Tの9周年を記念するフォーラムを持った。司会は竹内希衣子 (F C T)

思春期の子どものS O S — 鈴木裕也 —

思春期の子どものS O Sとして知られる拒食症と過食症は相互に連らなった同じ病気である。拒食症の子どもは10キロ、20キロと痩せて行き、30キロくらい痩せた所で一旦止まり、大変元気である。本人はスリムになったと思っているが、実際は骨と皮になって生理も止まっている。そして、だいたいの子で次の症状として過食が始まる。気に入っていた身体でなくなる時、いろいろな心理的症状が出てくる。あんぱん6ヶ、ゆであずき1缶、ジャム1瓶と食べてしまう彼らは、それらを買うお金がなくなると盗みを働くようになる。好きで食べているのではないから、吐く、又は下剤をかけたりを繰り返す。そして典型的症状として自信をなくし、本来の子ども社会から身を引く態度をとり始める。幼稚になり、年相応の成熟、自立ができなくなる。ここで初めて体重を減らした目的が浮かび上がって来る。彼らは単にスタイルをよくする目的だけでなく、何らかの原因で自分が今いる社会から逃避したい、子どもの様な身体になって子ども社会に自分をひたしてほっとしているのである。この居心地の良い場所から過食

になって元の姿に戻って行く時の不安は相当なもので、吐く、不安をまぎらす為に食べるの繰り返しである。この頃になると想像を越えた家庭内の混乱が始まる。皆といっしょに食事をしない。学校へ行けない。勉強が手につかない。しかも子どもに戻っているから、回復の時 (元の身体に戻る時) 思春期に見られる反抗、暴力、わがままなどの症状が短期間に一挙に出てくる。

治療法は話をして元気づけ、本人を年相応の所へ引き上げてやること。最近テレビドラマで、この病気が扱われていたが、どれも親が悪いと言いつ切っていた。しかし、親だけが悪いのではない。この病気は時代と共に増え、文化の発達した複雑な社会の都市部に多い。子どもがものすごい勢いで変化する社会に対応できなくなっているのではないか。そして女の子、それも良い家庭の良い子に多いという事は、今の子ども社会が鍵を握っている。今は学校にしても正義がとおらない社会となっている。良い子がやられる社会である。これは大人の社会の鏡である。子どもは行動の元をどこから学んでいるか。親、先生、そしてテレビ、これらを変えて良い子が悪い夢を見ないようにしなければならない。

大人の世界を押しつけないで — 児玉澄子 —

近頃の子どもはかって良さを非常に大切にしている。それもまず外見のかって良さである。男の子も女の子も着る物にすごい気を使っている。その為に勉強そっちのけでアルバイトをしている。外見の次が会話のかって良さ。会話がうまくない子はダサイ、こう言えばああ言うがうまく出せる子どもが、かって良くうまく生きて行ける社会である。言葉少なく、考えて物を言う子どもは浮き上がってしまう。さらに物に対しても、最新の物

を持っている事が大変にあって良いのである。そんな彼らが頭の中に描いているかって良さや幸せはテレビのどこからか知る事と深く関係していて、テレビドラマやホームドラマの嘘っぽい面に非常に影響を受けている。そして、現実の自分の生活がそれと同じに行かない事でいつも不満に溢れている。しかもホームドラマに出てくる良い家庭、良い子どもが彼らに定着しすぎていて、現実の家庭を考えたり、子ども同志のつき合いから現実を考えることができなくなっている。

先程からでている良い子について考えてみたい。今の良い子というのは、勉強がよく出来る子となっている。もちろんそういう子は教師から見て楽であるが、そうでない子どもたちの居場所がなくなってきた。しっかりした家庭に育ったとか、勉強をよくする以外の良い子がいるのではないか。これを子どもの世界でお互いに発見し合えるなら、多少のもつれはあっても子どもは各々多様な自立ができるようになるのではないか。しかし現実には、三年生ともなると受験一本で、良い学校へ入れば何かがある、今がまんすれば未来に何かあるという事だけで、子どもはストレスや葛藤を解決しないまま、大人が作り出した世界に追いつてられている。こういう中で、徐々に自立の道が閉ざされて行く。

テレビからの悪い影響を話してきたが、いい面も彼等を感じている。今の子どもたちは私たちにない面を持っている。その何分の一かはテレビ・映像の影響と考えている。去年の文化祭で大きなイベントをやり遂げた時、彼らはそれを発揮した。我々世代が思いもつかないアイディアが次々と出て来た。彼らの持つ豊かなアイディア、エネルギー、センスの良さ。これらは映像の時代に育った子どもならではの個性であると感じた。その時、共に物を作る中で誰がリーダーというのでもなく皆が一つの心になる事も発見した。そこで思ったのは、子どもの世界が大切である、子どもがいやされるのはそこである、大人の世界を押しつけるのではなく、子どもの持つ世界を見守り援助して行けたら、ということだった。

テレビリタラシーを養うー鈴木みどりー

リタラシーとは識字率、ノンリタラシー（文盲率）の反対の言葉である。従来、リタラシーは文字について使われてきたが、映像メディア時代の今日ではテレビや他の映像メディアについてもリタラシーをどう養って行くかを考える事が大切であろう。メディアの発達したアメリカや日本では特にテレビについての読み書き能力（リタラシー）が必要だ。ところが残念な事に、今の日本ではこの能力を教育する場、学ぶ場がない。私たちは生まれた時から経験の中だけでテレビリタラシーを学んでいる。しかし経験主義で学ぶのではもう間に合わない。テレビが環境化している今日では、良貨が悪貨を駆逐するのを待っては行れない。どうテレビの批判的視聴技能を養って行くかという事である。これをメディア教育と言うがメディアを教材として使う教育でなく、テレビというメディアについて学ぶ教育である。

テレビリタラシーあるいはメディア教育という考え方は1970年代、女性の自立を掲げた女性解放運動と平行して始まった。アメリカにおける黒人差別をなくす運動とも時を同じくしている。女性の役割固定をなくし、女性の解放を求める動きの中にメディアの見方を学ぼうという動きがあったことは注目すべきことである。

スイッチを切ればいい、見ない、子どもが成長しテレビ問題は卒業した、などとテレビメディアを今だに過少評価している人は少なくない。しかしテレビ問題は追求すればするほど社会全体に深くかかっていることが見えてくる。したがって積極的に学ぶ場をどう作っていくかがこれからの課題だ。一週間前にマニラでテレビリタラシーのワークショップを経験してきたので、その内容について少し紹介したい。それはアジア諸国のメディアに関する専門家30名余りが集まり●暴力、●役割固定、●情報番組の見方、●産業としてのテレビ、●様々な規制、などをテレビを見ながらワークシートに記入する方法で問題を浮かび上げさせ、共に学び考えるというものだった。アメリカ、

オーストラリアなどではメディア教育が学校ですでに実施されているし、ヨーロッパでも学校の授業の中にとり入れられている。日本でも今後、ゆとりの時間などに組み込まれて行くことを期待しているが、その実現には時間がかかると思われる。そこで市民レベルでの取り組みから始めるのが早道だろう。

受け手の側から働きかけよう

Q (女性) 拒食症が社会の問題という事がよくわかったが、この病気とテレビや雑誌との関係は？

A (鈴木) テレビや雑誌はスリム志向に溢れている。しかしこれだけでは拒食症にはならないだろう。かって良いとか、就職に有利とかでダイエットを始め、いい所で止まる。これは普通のダイエットである。拒食症はそれを越えガリガリである。しかしこのスリム志向がこの病気を発病させる原因になる事は大いに考えられる。

Q (鈴木) 治療のプロセスの中で、具体的にテレビの受けとめ方などを指導していますか？

A (鈴木) 残念ながら今迄は行ってない。私個人としてはテレビは良いメディアだと思うが、両刃の刃である。悪いものとしてこの病気との関係がはっきりすれば、治療にも使って行きたい。

Q (女性) 拒食症の子どもと家族の関係はどうなっているのか？

A (鈴木) 彼等は家族の中、社会の中で孤立している。拒食症の子どもは母親が外で働いているケースが多い。近ごろ子どもが中学になると手が離れたと親が外へ出てしまうが、中学生では内面的自立はまだ充分でない。自立させる為に手を引くことと、手を抜くことの違いを知らなければならぬ。テレビなどで、母親がやみくもに外へ出る事をかって良しとしているが、まずちゃんとした大人を育てるテレビが必要である。

Q (女性) 病的とまで行かなくても、今の子どもたちはこだわりが強過ぎるようだが…。

A (鈴木) 余裕がでてきた世代の求めるものはテレビなどからの情報に相当支配される。この様に物質的に恵まれた社会に育った者は辛抱強さに欠

け、挫折しやすい。

Q (女性) 情報が溢れる中で、学校の先生たちがわかっていないと感じる。

A (児玉) 教師が忙し過ぎる。学校自体が多くの人間を集団で動かす組織となっている。教育の変革の中で数を減らすという事が考えられた事がない。

Q (男性) コンピュータ教育についてどう考えたらいいのか？

A (鈴木) かなりの学校ですでに実施されているが、実はこれが非常に儲かる市場である。テレビメディアは経済的富を得る人々により使われているのである。これをフィリピンで強く感じた。マニラではCMが33%も挿入されており、その多くが多国籍企業のものであった。目立ったのがアメリカのたばこCM、アメリカで追放されたものがアジアで堂々放送されている。アメリカ市民の目がアジアへも向くべきである。日本についても同じ事が言える。

A (児玉) 居ながらにして世界の事が知れるなどテレビの効用も考えられるが、悲劇的事件や戦争のニュースが繰り返し放送される為、それらに対して不感症になる危険性がある。文字を読みながら頭の中で映像化する事が大切。そして、良い文章は映像より心に訴える力がある。

A (鈴木) テレビを見ている時の脳波はアルファ波で、睡眠時と同じになっており、読んだり書いたりしている時は活動的脳波ベータ波を出している。

Q (女性) たばこの喫煙シーンやCMが増々洗練され、映像効果満点になってきた。これでは親がいくら言っても聞かせても、マジョリティについて行くのが今の子どもたちである。アメリカでは、たばこのCMを流す場合、その害の情報も平行して流していかなければならないとなっている。放送コードを守りなさい、正しい情報を流してほしいと、受け手の方から働きかけられないものか。

(まとめ 桑野啓子)

新シーズンの番組拝見

FCTでは10月より番組がどのように改編されたかを知るために、スタッフ7名が新番組を見てその結果を持ち寄り、12月8日、横浜で話し合ってみた。

A 民放各局が報道番組に力を入れた。以前は報道というとNHKが断然リードしていたが、日航機事故や大島噴火の報道では民放もがんばっている。

B 大島の取材で言うとNHKは迫力がなかったし、逆に日本テレビは火口に近づきすぎて危険な取材ぶりだった。フジテレビやテレビ朝日の「ニュースステーション」ではニュースを煽る傾向が見られ、危険に思えた。

A 11,000人の島民が整然として脱出した時の情報の徹底ぶりはかなりのもので、テレビの役割に意義があったと思う。

B 避難している人たちが自分たちの住んでいる場所なのに、情報をテレビから得ているのには驚いた。行政より報道が優先していたと思う。

C 女性レポーターも日航機事故以来増えている。民放では今回も若い女性レポーターが親しげに島民にインタビューをすると、結構話を聞き出せていた。NHKのごつい男性記者ではこうはいかない。けれど女の媚びを利用して取材するのは困る。

D 大島の噴火は映像としては魅力があったが、テレビが主導権をにぎってしまうのは危険。

A 行政は今回の事も含め、テレビの役割について意識したと思う。これからは逆にテレビをコントロールし、自分たちの手段にするよう益々腐心する事だろう。

E 今後は有事の際のテレビ管理が問題になってくるので、私達もこの辺に注目していきましょう。

B 「お子様ネットワーク」(TBS)という子どものニュースショーが始まったので、楽しみにして見たががっかりした。ニュースの内容が田園調布の急坂の話とか、30万円もするクリーナーの事で内容が案の定、“お子さま”向け。子どもの

キャスターが登場するだけの話でした。

C 子どものニュースショーで大事なものは、大人のニュースと同じ内容をいかにして子どもに分るように報道するかという点なのです。そういうニュースショーがないから、子どものニュースショーが必要だと主張したのに、テレビ局はちっとも理解していない。

B 報道局で制作すればそういうニュースショーも可能かもしれないし、FCTへ相談に来れば作り方のノウハウを教えてあげたい。

E 論説委員が三宅裕司ときては笑わせるための起用としか思えない。これではTBSが良心的だなんて言っていられない。

F 「夕焼けニャンニャン」の小学生版で「鶴太郎の大人によくないテレビ」(テレビ朝日)という番組があるが、これがひどい内容で、子どもが真面目に言っている事でも、鶴太郎がチャカしてしまう。

B 子どもの関心事をすべて男女の付き合い、つまり異性に向けていってしまう。小学生に「恋人いるか?」「あれしたか?」「どこまでしたか?」などと聞く始末。まったく発想が貧しい。

A 鶴太郎は下ねたのチャンピオンだから、小学生番組に起用すること事態間違いだと思う。

G スタジオ内の子どもたちの中で、気のきいた受け答えができると、その子は仇名がついてレギュラーになれる仕組みになっているので、子どもは受けようとする。

子ども不在の特撮もの、学園ドラマ

F 子ども向けの特撮物のドラマには「時空戦士スピルバン」と「超新星フラッシュマン」(テレビ朝日)の2本がある。この2番組は類似点が多く、アニメみたいにロボットも出れば、従来の特撮物のように怪獣も登場する。

G 地上げ屋とかやくざとか今の時代を反映するような設定が、子ども番組にもあるので驚いた。

D 両番組ともグループのキャラクター仕立てで、女性は超ミニスカートにお腹が出ているというひどいスタイルになっている。「超新星フラッシュマン」では心臓から光が出るという設定で、一瞬、乳房が出るのではないかとギョッとした。

F ファミコンのゲームみたいに展開がやたらに早く、ストーリーはお粗末でテーマがない。

C 初期の特撮物の「ウルトラマン」シリーズ等テンポもゆっくりで怪獣にも個性があった。再放送で今も人気があるようなので、子どもは早いテンポしか好まないという発想はおかしい。

B おもちゃを売るために作っているだけで、子ども不在の番組制作になってしまっている。幼児がこの種の番組を見て、暴力的で強烈なイメージだけがすりこまれていく事に問題を感じる。

G 学園ドラマでは「セーラー服反逆同盟」(日本テレビ)が始まったのですが、内容がひどすぎて、子どもと一緒に見ていられなかった。

B 教室は暴力団のたまり場みたいで、なんと就職の求人申し込みが“組の人”でした。(一同笑う)

G 先生は生徒に「てめえら」「おまえ」という言葉使いだし、内容が反社会的すぎると思う。

C 非行を肯定している番組になっている。

F 暴力や暴力団をファッション化し、右翼賛美や保守化現象とつながる恐れもある。

B 日本テレビのイメージダウンもはなはだしい。こんな番組を、どうして制作するのか聞きたい。

アニメの多様化、女性像は固定的

B 次にアニメについてみると、6時から8時の1週間各局合計で45本もあり、非常に増えている。内容はロボットものから学園ものまでバラエティにとんでいる。

A 視聴率を2桁取るには、アニメが確実だから本数も多いのでしょう。

B 「青春アニメ全集」(日本テレビ)等アニメにする必要のないものまでアニメ化している。これは望ましくないと思う。

D 今の子どもはアニメの方がとっつきやすいのかしら。30分で見終えるし。

F テレビで見てから本を読むというケースもあるのではないかしら。

B それは危険だと思う。本の場合はイメージがふくらむが、アニメの場合イメージが固定化してしまうのではないか。

C 「オズの魔法使い」(テレビ東京)は、画面も音楽もモダンで良くできているし、全体に緊張感みたいなものも感じられた。小説には小説の良さがあるようにアニメにも独特の良さがあるので、完成度の高いものであればアニメでも良いと思う。ドラマ等に比べアニメがやたら多いのは問題だと思うが。

D 暴力的なアニメも多くみられ、「マシンロボ・クロノスの大逆襲」(テレビ東京)は残酷だし「北斗の拳」(フジテレビ)も劇画調でどぎつい。

C アニメは玩具だけでなく、ファミコンのカセットとして商品化されている。「ドラゴンボール」(フジテレビ)等。アニメの内容は多様になっているが、女性の描き方はどのアニメもステレオタイプが見られ、がっかりした。

A アニメの原作は人気マンガの場合が多いが、最近では小説よりマンガの方が面白いものがある。

E 小説にはマンガで味わえないような醍醐味があるのではないかしら。

B 今の時代というのは、マンガの世界が小説を浸蝕し、それがアニメ化されているという状態でしょうか。世代の違いとか個人差もあって、活字によりイメージのふくらむ人もあるし、マンガの方がおもしろいという人もいる。これはメディアリタラシーの問題でしょう。

E バラエティでは「ドキドキちゃんスピリッツ」(TBS)という萩本欽一の番組が7時台に登場している。いじめや暴力の設定も少ないし、パントマイム等アクションも工夫されている。

A 欽ちゃんの場合、暴力とセックスは扱わないというポリシーがある。

G 番組のテンポもゆっくりだし、ビートたけしのように女性蔑視の傾向もないので、今後を期待しましょう。ただし7時20分から8時50分では長過ぎるみたい。(まとめ 新聞清子)

FCT データ・バンク

— 国内篇 —

●マスメディア文化と女性に関する調査研究（婦人問題に関する調査研究報告書）、東京都生活文化局婦人青少年部、1986年11月。

婦人問題専門家の神田道子を代表に女性とメディアのかかわりを研究テーマとする井上輝子、松村泰子、FCTから鈴木みどり、竹内希衣子が参加し、さらに女性雑誌研究会の諸橋泰樹らの若手研究者を加えて結成された「マスメディア文化と女性に関する調査研究会」が東京都の委託を受けて2年がかりで完成させた報告書（PP. 312）。

2部から成り、1部では既存の研究データをレビューする中で女性をめぐるマスメディア状況に関し、メディア内容と送り手側の問題点を明らかにし、また今後、女性問題でも重視されるべき「メディア教育」の概要と方向を紹介している。2部では受け手の女性の生活や自律意識と接触しているマスメディア内容の種類、マスメディアへの接触態度がどう関連しているかを調査によって明らかにしている。

2部についてみると、調査は東京都に居住する16～69歳の女性1,500人を対象に85年9月に実施。有効回答数941人（62.7%）。主な調査項目は①マスメディア接触状況（テレビ、新聞、雑誌、本の接触量、内容、態度、マスメディアに対する信頼感、マスメディア知識等）②コミュニケーション活動（家族・友人関係、近所づき合い、社会活動、学習活動）③自律意識（性別役割分業観・能力観・伝統的価値観等の性役割意識、充実感・消費者意識等の生活意識）。

調査結果から興味深い点を拾うと、まずマスメディア知識と女性の意識の関連では①全般的にいてメディア

知識は高くない。特に新聞・雑誌の発行の自由（正答者24%）、CMや番組内容の規制（31～34%）に関して正しい知識を持つ女性が少ない。

②メディア知識の高い層ほど新聞・雑誌をよく読んでおり、その他のコミュニケーション活動も活発である。ただし、メディア知識の高さとテレビ視聴時間とは関係がない。③メディア知識の高さはメディアに対する批判力、また女性の自律意識とは直接結びついていない。

マスメディア接触内容・接触態度と女性の意識との関連では、まずテレビ・新聞・雑誌の接触内容によって女性を5つのタイプに分けることができ、接触内容と性役割意識との間にかなり密接な対応関係がみられる—①伝統的娯楽型（全女性の17%）、②多面的娯楽型（9%）、③シティ情報型（16%）、④生活実用型（27%）、⑤硬派教養型（31%）。このうち性役割意識で平等志向が強いのは10代、20代が8割を占めるシティ情報型、40～60代の既婚、有職者の多い硬派教養型だが、前者はCMに無批判であるなど消費生活では依存的で、また後者はマスメディア接触、その他のコミュニケーション活動で活発な層と不活発な層を含み込んでいる等いずれも問題はある。

マスメディアへの接触態度からも女性をタイプ分けできる—①参考実用型（11%）、②限定利用型（5%）、③話題志向型（25%）、④エンジョイ型（20%）、⑤表面的接触型（27%）、⑥抵接触型（12%）。このうちメディア接触・その他のコミュニケーション活動が比較的活発なのは20～30代主婦専門層の多い参考実用型、30～50代主婦専門層の多い話題志向型だが、いずれのタイプも女性意識は伝統的な性役割意識から抜け出せていない。また30～40代既婚有職者に多い表面的接触型は女性意識は非伝統的で自律性・男女平等意識が強いもののコミュニケーション活動は活発とはいえない。（F）

●テレビと女性—テレビ・モニターの結果から、「部落解放研究」No.52、1986年10月。

大阪の部落解放共闘婦人連絡会議は86年4月、参加団体の分担で大阪で受信可能な全テレビ局の一定の時間帯を3日間モニターし、テレビ番組の中の女性の描かれ方を点検した。その結果を番組ジャンル別の特徴と問題点として次のようにまとめている。

①昼のワイドショーではトピックスが芸能界中心で、若いアイドル歌手の自殺を複数局でとりあげるなど安易、無責任で死の讃美、後追い自殺などの危惧がある。また司会のあり方では女性の補助的役割、会話のはしばしにあらわれる偏見や差別が問題。カメラワークも番組内容と無関係に足元や胸元を映している。

②ドラマでは現代の女性をとりまく状況を描く意図があらわれているものもあるが職業が一部に限られ、個々の人間の発言には女性差別がみられる。子ども向けドラマやアニメ番組では男女の特性や役割が固定的で子どもに固定観念を植えつける。

③お笑い番組では基本的にワイドショーでの問題が同じようにみられ、その上「笑い」そのものが差別をネタにしている問題が多い。

④CMでは男女の伝統的な役割分業を前提にしている。女性のセックス・アピールを売りものにしている、女らしさのイメージを固定化する、働く女性に固定的な役割を押しつける等の問題が指摘されている。（M）

●女のラジオが始まった、石射虎三郎、「放送レポート」No.84、87年1月。

昨年10月から東京の文化放送で始まった「日曜の夜はテレビを消して—落合恵子の、ちょっと待ってMONDAY」という長いタイトルのラジオ番組を紹介する。これはフェミニズムの視点で企画・放送されている週一回の2時間生ワイド番組で（夜9時30分～）すべてが女性の手で制作されている。この女性たちの

熱意に応じて落合は“作家”として10年ぶりにラジオに再登場した。

この番組の誕生の経緯をみると国連婦人の10年最終年の11月、ラジオ沖縄が女性プロデューサー等の女性チームで「うないフェスティバル85」という12時間生放送を行なったが、それに感動した文化放送の鎌田啓子が局内の女性たちに呼びかけ、「働いている女性のために役に立つジャーナル情報やくつろいだ気分を提供できたら」「東京みたいな条件のいいところで何もしないのは恥かしい」と話し合い、電通の女性スタッフと組んでスポンサー探し。UCCコーヒー、セブンイレブンの提供が決った。

男性聴取者が意外に多いが「硬い」という反応。しかし、それこそ女性に対する偏見と鎌田らは反発し、「働く女である自分自身も聴きたく思うような」番組作りを志している。女性はずまず実際に聴いて、自分で判断する必要がありそうだ。(M)

●欧米のテレビ子ども番組—最近の動向より、小平さち子、「放送研究と調査」、1986年11月。

ヨーロッパを中心にカナダ、オーストラリア、アメリカなどのテレビ番組を紹介、分析している。紹介されている番組は「プレジュネス」(ミュンヘン国際テレビ青年賞)に提出されたものと筆者が視聴した海外の子ども番組。これらの番組分析を通して欧米諸国の子どもとテレビの動向を探っている。それによるとヨーロッパでは子ども向けドラマの充実が目立ち、子どもの視点で厳しい社会の現実を描くもの、障害者とのコミュニケーションを題材としたもの、国際理解をめざすものなど、日本の子ども番組では見られない特徴がある。またこのような番組が生まれる背景には子どもをとりまく社会状況の変化があることを指摘している。一方アメリカの子ども番組は商業主義におかされ充実した子ども番組はわずかに公共放送で作られてい

るのみという。具体的に一本一本の番組が詳しく紹介され各国独自の問題もわかる。(Y)

●特集・食とどう出会う?、「はらっぱ」第43号、1986年10月。

保育を考える仲間たちの共育季刊誌で今号は食をとりあげ①好き嫌いなぜ悪い?(早川勝、枝本信一、小松宏他の座談会)②暮らしの思想を見直す(村山勝茂)③食生活のファッション化(宮本豊子)④子どもを狙うテレビCM(鈴木みどり)⑤幼い頃から消費者教育を(鈴木洋子)自分たちでお米を作ってお餅食べたよ(矢口幸子)、アレルギー食の取り組み(鏑木純子)など幅広く食のかかわり、食の問題をとりあげている。鈴木みどりはテレビとの関連で食の問題を捉え、テレビCMの中で特に子ども番組の中の食品CMの多さ、問題点を指摘している。子どもを養育するおとなに求められているのは食に対する問題意識を明確に持つだけでなくテレビメディアへの客観的・批判的接し方が必要だとしている。(Y)

●子どもの発達と母親の意識に関する調査の結果と分析<その2>、現代社会における発達と教育・研究委員会、日本教育学会、1986年3月。

0~3歳の乳幼児を持つ母親へのアンケート調査の結果。テレビの見せ方についての質問が1問あるのでその結果をみると家庭保育児と保育園児の間で差がみられ①ほとんど見せない—㉑ 4.2%、㉒ 9.2%、②番組や時間をきちんと決めて見せている—㉑ 21.6%、㉒ 31.8%、③一応は決めているが見たがる時は見せる—㉑ 35.0%、㉒ 35.5%、④テレビをつけている時が多いので適当に見せている—㉑ 18.4%、㉒ 12.7%、⑤見せ方についてまだ考えていない—㉑ 18.9%、㉒ 7.9%となっている。またテレビの見せ方が厳格な母親ほど育児での疲労感、不安感が少ないこともわかった。(M)

●メディア教育を拓く、後藤和彦・高桑康雄・坂元昂・平沢茂編、ぎょうせい、1986年12月刊。

メディア教育のすすめシリーズ(全5巻)の1巻目で4章16節より成る。1章・現代社会とメディア教育の要請、ではメディア教育を必要としている社会的背景、メディア教育の系譜をたどる。2章・メディア教育の位置づけ、では隣接概念である映画教育、放送教育、マスコミ教育との関連を問いメディア教育の位置づけを明確にしている。3章・メディアリタラシー、ではメディア教育によって養われる能力がわかる、つかう、つくるの3能力であるとして、それぞれについて検討し、メディア教育の構造解明を試みている。4章メディア教育の実践、では実践例を国語科、社会科、理科、総合科の各々で具体的に紹介し、またメディア教育のための教師教育、社会教育におけるメディア教育についても検討している。(M)

●テレビであそび、批判力を育てるメディア・ワークショップ、鈴木みどり、「GROW UP」1986年10月。

同誌の特集・あそびにみる現代の子ども像の中の一つ。横浜市の小学生のためのAあそび塾で行ったメディアワークショップの模様を紹介している。ワークショップは1回目は「北斗の拳」のVTRを使って暴力について、2回目は子どもの時間帯に入るCMの量と種類について。その方法をみると、まず子ども各自がVTRを見ながらワークシートに記録をとる。「北斗の拳」では暴力場面が出てくる度に暴力の種類、行為者、被行為者、暴力の結果を記録する。CMの場合は1時間に挿入される全CMの商品名、企業名を記録する。次に子どもたちを小グループに分け、記録のまとめ、それに基づく話し合いをする。筆者はこの話し合いの中で子どもが鋭い観察眼を持ち、テレビの安易な姿勢を批判する発言が次

々に出てくると報告している。(B)

●特集・テレビへの期待、「世界」1986年11月号。

これから10年は報道番組の時代が続き、30年先はテレビが娯楽の王座からすべり落ちていくだろう。いまのように新しいこと、面白いことだけを追い求めている限りテレビの先き行きは茶の間でいちばんホットではない家具になっているだろう、と予言しあっている民放各局編成と制作にかかわる6人の座談会「テレビのいま・これから」は、それぞれ巨大化したテレビのあり方に自嘲と自戒をこめて語っている。

「たけし現象を考える」は、欽ちゃんの芸と笑い、たけしの芸と笑いを対比させつつ、伝統的な笑いに根ざす欽ちゃんの後退と、芸以前の毒を含んだ言動で視聴者を共犯者としてまきこむたけしの笑いの本質に考察を加えようとしている。(松尾羊一)

「テレビとプロダクション」(今野勉)・「報道番組のテレビ化とは」(高村裕)、「二つの放送の未来像」(青木貞伸)、対談「ドラマの危機と可能性」(今江祥智、山田太一)、それにニューメディア時代にそなえて体質改善をはかろうとしているNHKの体質そのものの問題点を提示した「NHKはどこへ行く」(松田浩)と、特集としての体裁は整えられているものの、全体を通して“期待”よりも“危機感”の方が印象が強いということは、テレビの現状の深刻さをはからずも露呈した感じだ。(T)

●分割民営化に脅えるNHK、野間映児、「創」1987年1月号。

最近NHKが合理化のピッチをあげている。具体的には人員を減らしタイアップ番組の制作をふやすなど民放の悪しき部分を真似はじめていく。例えば「大黄河」や「ループル美術館」にしても海外取材番組では制作費を切りつめるためのタイアップをそれとなく組みこみ、出来た番

組は外国へ派手に売りこんでモトをとろうとしている。また「ドキュメント昭和」をはじめとするヒット番組は外の出版社から単行本として売り出され、多額のロイヤリティをとっている。NHKとしても番組の宣伝になるこの手の出版に意欲をもやしている。このようになりふりかまわず儲けることに執着しだした裏には、国鉄と同じように慢性的赤字をかかえているNHKが、元行革審筋から「分割民営化を強行するぞ」と脅かされているという事実がある。

この脅しの真の狙いはNHKの赤字解消ではなく、一種の言論規制にあるのではないか。昨今のNHKの報道番組の元気のなさ無気力さは、その表れである、皆さまのNHKはどうなったのか、と問うている。(T)

●特集・テレビに期待しない、「ダカーポ」第122号、1986.12.3.

放送局の電波(テレビ番組)のみならずVTRやOA機器の端末さらに未来のハイビジョン放送まで、つまり視聴者が一方的受け手ではなく参加することなどブラウン管によって家庭に供されるすべてのものを“テレビ”と定義づけている。

視聴率争奪戦の結果がテレビ文化の質の低下を引き起こし、メディアに対する苦情処理機関やオンブズマン制度など(欧米では制度化されている)監視機関が育たなかった日本のマスコミ業界に対する批判。

加えてテクノロジーの急激な進歩で今まで受け手であった人々によるVTR、パソコンなど積極的な参加に、急成長で歴史の浅いテレビ業界は送り手としての方向性を失ったと言う。放送評論家・大森幸男は「今こそマスコミの使命であるジャーナリズム機関としての働きに目覚めよ」と呼びかけている。

同時に作家や脚本家などにアンケート調査も行っているが、ほとんどの人がテレビの持つ恐さ、レベルの低さを指摘し、見ている番組はスポ

ーツ番組、ニュース番組などドキュメンタリーなものである。

今後テレビは“送り手制御型”から“視聴者志向・参加型”によって視聴時間は増大する。眼科医の立場からの長時間目を使用することによる眼性疲労の話も興味深い。(KZ)

●テレビ時代、マーティン・エスリン著黒川欣映訳、国文社、1986年5月。

著者は、1940年から1977年までBBC放送に勤め、「プレヒト一人と作品」「不条理演劇」などの著書で知られ、BBC退職後は、スタンフォード大学ドラマ科で教鞭をとっている。

世界の 대중文化に影響を持つアメリカのテレビを鋭く批判し、いかに、明日の人間社会に役立つことが出来るかを情熱的に説く。①ドラマ性の激増、②コミュニケーションとしてのドラマ、③フィクションから現実へ、④現実からフィクションへ、⑤テレビの長期的影響、⑥規制の問題、⑦未来への挑戦。

最後の章で、急速な技術革新が進行している社会では、電子的マスメディアが重要な立場を取らざるをえない。それは、良くも悪くも、教育制度の重要部分である、と述べている。テレビの性質、演劇的なメディアとしての限界と長所など完全に理解されれば、基本的改革はテレビの番組制作の中でできる。メディアを理性的に活用し、演劇的な番組の芸術水準をあげることに重点を置き、ストーリーを語る方法としての長所を使って、社会的、政治思想的な問題を劇化することで、徐々に知的内容を高めていくのである。同時に視覚的なデザインの分野でも、好みの水準を高めていく。テレビを知的に評価してみる必要がある、と説く。

テレビ時代の教育制度では、知性と鑑賞力を持って、いかにテレビを批評的に見るかを教えなければならぬ。低学年段階から基礎教育科目に。高学年では、演劇批評の方法をテレビ番組の評価に適用させる。

訓練を受けた知識のある視聴者が番組の水準に積極的な影響をもたらすことになる。

アメリカのテレビのつまらなさそのものが大衆の無関心の前提になっていて、大きな国家的不幸はこういう自己満足から生じている。アメリカが手をつけなければならない重要事項のトップは教育制度におけるテレビの重要性を認識することと国中にこの認識を広めることだ。(J)

●マスメディアの現在、法学セミナー増刊総合特集シリーズ35、日本評論社、1986年10月。

通信技術の発達、FF現象、劇場犯罪の放映、人権侵害等内包する問題点を対権力の関係、市民との関係、そして将来像と外国のマスメディア状況などの19論文。さらに座談会(内川芳美、原寿雄、堀部政男)対談(西部邁、筑紫哲也)と9つのエッセイ。解説資料として重要判例とこの8年の重要文献の紹介など掲載している。

稲葉三千男は、86年7月の同日選挙と83年の大韓航空事件を例にとり権力の情報操作を指摘して、情報操作を可能とする社会情勢を問題にしつつ、「効率」から「人権」への価値転換の必要を説く。

天野勝文(毎日新聞論説委員)は76年、朝日新聞記者疋田桂一郎が社内誌に書いた「ある事件記者の間違い」と79年12月号「新聞研究」の原寿雄の「発表ジャーナリズムへの抵抗」の2つの論文を紹介して、発表ジャーナリズムの克服について述べる。

川本三郎(評論家)はビートたけしが講談社に乱入する以前に「覗く権利」より「殴る権利」のエッセイを書いており、60年代までには、ジャーナリズムに対する批判が常に強力に存在したが、今は、ジャーナリズムに対する批判がなくなり、マスコミは権力になってしまっている。このくらい乱暴なことを言わなくてはならない程スキャンダル・ジャー

ナリズムは傲慢になっている、と結んでいる。(J)

●マスコミ日記、青木貞伸「マスコミ市民」No.219、1986年12月。

毎号掲載されるこの日記は各新聞・テレビ報道やマスコミの動向を筆者・青木が目で分析、解説するもので、大量の情報に流されやすい日常を立ち止まって考え、メディアに批判の目を向ける契機として役立つ。

12月号では中曽根・金斗煥会談、知識水準発言、日米共同統合実動演習などの記事からジャーナリズム機能の後退を指摘している。

ここでは、2つの誤報道の問題を取り上げる。まず9月15日ソウル金浦空港爆弾テロ事件報道。この事件では現場検証直後に行なわれた治安本部の見解、即ち一方的に北側の犯行と断定する韓国の発表を日本の各新聞はそのまま伝えた。この報道は、日本がかつて犯した情報操作の例と類似して(下山事件、松山事件)、韓国側の意図的情報操作に日本のジャーナリズムが無批判に乗ったものであるという。

10月11日漏電ショートによる電車停止を過激派の犯行として伝えた報道にも同じような先入観念と思い込みがあった。朝の電車ストップの原因を、毎日新聞を除く夕刊各紙で、1面4段、6段抜きで「ゲリラ?」「ゲリラの可能性」と書いた。ところが朝刊では「犯人、ケーブルの穴」となっていた。これについて筆者は86年10月31日号の朝日ジャーナルの「メディア時評」を引用しながら、この新聞報道で有事の際の情報操作がいかにか簡単か思い知らされた、と書いている。その引用の部分は、

電車のストップの原因を捜査に入らないうちにテレビが「過激派の犯行か?」と伝え、新宿駅ではテレビが放送していたからという理由で、構内放送で「過激派によるものと思われます」と繰り返し流したという。そういう構内放送があったことを、

過激派説の補強情報として使った夕刊もあった。誤った情報が増幅され、本当らしくつくられていく。「井戸に毒を入れた」というデマが朝鮮人虐殺につながった関東大震災時の典型的なパターンを思い起こさせる。(J)

●特集・読者はいま何を求めているのか、「新聞研究」No.426、1987年1月。

雑誌、新聞、テレビ、書籍の受け手のニーズについて考察する特集。

雑誌では少年ジャンプ、フォーカス、週刊ポスト、SAY、女性自身、月刊アスキー、プレジデントの7誌編集長がそれぞれの読者像を書いている。その中では結婚前の19~24歳の女性を主要な読者層とし、彼女たちと編集部の間をホットラインを通じて入ってくる感じ方、ものの見方、考えを基本として雑誌作りをしていると書くSAY編集長が「創刊してからすでに3年半になるが、この間、ホットラインで誌面について批判したり、自分の意見をぜひ載せてほしいというようなことを言った読者はいなかった」「電話で一番多いのが恋愛の悩み」と述べていて、女性雑誌とは何かを改めて考えさせる。

「情報化社会の若者たち」でNHK放送文化調査研究所の新井久爾夫は今日、価値観の多様化がいわれているが、むしろ画一化の方が進んでいると述べ、それは社会の情報化で人が孤立し、個人的な世界をつくることを難かしくされているからではないか、という。多様化は趣味やライフ・スタイルなどの人格の表層に近い部分でみられる現象にすぎず、最近の若者の特徴をみても、新人類のイメージとは裏腹に社会や大人に対する批判は弱まり、生活の満足感も過去10年で目立って高くなっている等の調査データがあり、若者は大人の考え方や生き方に近づいているように思われる。

他に「言論の自由と多様な媒体の共存」室岡和男(朝日新聞)、「書籍離れ、三つの命題—読者世論調査か

ら」越谷和子（毎日新聞）「視聴者ニーズと視聴率」大乙彦（TBS）「情報リタラーから見る読者の関心」清原慶子（常磐大学）等。（M）

●都ぶりと田舎者、会田雄次、「Voice」1987年1月号。

東京を都たらしめているもの、それは映像文化である。その高さによって日本全国の憧れの的になり得ているのだ。活字に対する映像の有効性は近年ますます差がつくばかりだが、映像のもつ宿命として極小時間を表面的に捉えているものであり、その時と部分の選択は実は極端な撮影者の主観に依存している。しかし現実にはこの映像を実像として受けとめ、報道とあれば更に疑いをさしはさまない人間は増えるばかり。と考れば映像という虚像をあふれさせている東京はけっしてまともな人間にとっての花の都たるものではない。活字と言葉に対する映像の優位はこの都会ではますます進行し、それは中曽根首相をはじめとする政治家たちが最も利用しやすいメディアとして政治の場での活用につながるというのが行きつくところである。

関西文化人としての筆者が映像文化の高さとは？という切り口で東京と地方を分析している。（T）

●連載・アイドル自殺以降Ⅰ～Ⅳ、西山明、「私教育」86～89、1986年6月～9月。

アイドル歌手岡田有希子の自殺直後、そのあとを追うように江戸川沿いの高層ビルから身を投げて心中した姉妹があった。共同通信記者の筆者がその二人の少女たちを死に追いやったものは何であったのかを探ろうと4回のシリーズでルポしている。姉妹の残した友人あての「遺書」や交換日記、また二人の自作漫画と数少ない友人たちの言葉から彼女たちの内面の世界を探っている。現実の彼女たちの孤独で狭い世界と漫画で描かれる華やかで自由な世界の溝の

深さが語られている。家族との精神的交りもほとんどなく、両親は彼女たちの内面を全く理解できないし理解しようとも思わない。両親の語る彼女たちの生い立ちから、親子の信頼関係の基盤がないまま育ったようす。彼女たちが虚構の世界に誘い込まれたわけがわかる。このルポは単に姉妹心中事件取材で終る事なく「現代」の若者の多くがこの状況にあるのではないか、それをおとなたちが理解していないのではないかと問う鋭い警鐘となっている。（Y）

●彼女たちはなぜ拒食や多食に走る、鈴木裕也、女子栄養大学出版部、86年。

その昔、裕福な家庭の美人に多いといわれ、神秘性をおびた病気だった拒食症がありふれた庶民的な病気に変わってきた。最近はいじめにあったことが契機で発病している例が少なくない。いじめも拒食も発生基盤に共通した子ども社会のひずみや生育歴の欠陥が存在する。

本書は摂取障害「拒食、多食」を内科医の立場で具体的な臨床例によって究明し、その予防と対応策を漫画入りで分かりやすく説明している。

拒食のあとの多食という残酷な儀式。多食期には登校拒否や閉じこもり、対人恐怖、盗みなどがみられ、拒食期とは異種の混乱を家庭内に巻き起こし、家族をいっくに地獄絵の中に引きずり込んでしまう。

拒食に走る年齢層の若年化と高齢化の両方に裾野を広げつつある「やせ願望」の背景には女性にとって住みにくい複雑な社会と変貌しつつある日本の歪みがある。（A）

●若いのちの像、児玉澄子、ウイ書房、1986年。

48の鏡に映される自分のあるがままの姿を見つめて20年、「若いのちが伸びゆく様を受けとめること」が教師の喜びと、高校生を前に「生身の人間として生徒と向き合い、あるがままに受け入れることで心が開

かれていった」「若いのちを傷つけたり、歪めたり、窒息させたくない」と語りかけている。

1章のカウンセリングに心開かれて、に続き②非行と呼ばれる行為のあとで、③受験体制のはざま、④集団の中で癒え傷つく個、⑤行事、創るよろこび、⑥教師の日々、と6章に渡り著者が向かい合いかわり合ってきた生徒たちとの記録がありのままに綴られている。

子どもが自らの経験を感じたまま、表現できるように保証してやれたらどんなに豊かに知能も技能も伸び、心身共に健やかに育つことだろう、大人があらかじめ予想し期待し、押し付ける姿に表現させようとしたら子どもは萎縮し、不安と恐怖を抱いていつわりの表現をするのは必至である、と著者は書く。（A）

●少年は死んだ、門野晴子、毎日新聞社、1986年11月。

中野・富士見中「いじめ地獄」の真実という副題の通り、同中学校・鹿川少年の自殺事件（2月）を追うルポルタージュ。著者自身2人の子どもの母親として「いじめ」、教師の暴力、教育の腐敗と闘ってきた体験を持ち、現在もフェミニストセラピストとして思春期の子どもの問題と深くかかわっている。そんな著者の体験と重ね合わせながら少年は何故死んだのかを関係者に取材する中で探っている。

中野区は全国で唯一、教育委員準公選を実施している自治体である。その中野区で起った悲惨な事件であっただけに、テレビ、新聞のマスコミが殺倒し、報道はエスカレートするばかりだった。このマスコミの姿勢、報道の仕方への批判が随所にみられ、特に少年の母親、いじめっ子として一部マスコミに実名が出た少年の母親、担任教師への取材では彼らがマスコミに翻弄され、結局、マスコミによる各々のイメージが一人歩きしてしまっていることを明らか

にしている。

多くの関係者を訪ね、話をききながら少年の死の原因を考え続けた後、これは結局、教育行政の犯罪であると著者は確信するに至る。さらに「ふつうの人々」の本質にひそむ競争欲といじめの快感が現代の子殺しという現象をもたらしている、「教育の荒廃の仕掛人は文部省にあるが、「いじめ」は私たちひとりひとりの中にある」と書いている。(M)

●特集・私立図書館の可能性、「地方自治通信」、1986年9月。

現在の公立図書館のあり方問題点を問い直し、市民の自発的・自主性を生かした創造的文化活動という視野から私立図書館の可能性を探ろうという試みの特集。公立図書館の場から考える私立図書館一矢野有(くにたち中央図書館長)、公共図書館を問いなおす一昼間守仁(小平市中央図書館)、私立図書館を考えるために一竹内愨(図書館情報大)、子ども文庫の現状と展望一清水達郎(東京新聞編集委員)など6氏の執筆による。また「地域に開かれた私立図書館」としてユニークな活動を続ける文庫、かげろう文庫(人と人の輪がつくる)、ふきのとう文庫(身障児文庫)、私立鶴川図書館(農民図書館)などがその主宰者により紹介されている。(Y)

●特集・アメリカの旅1986、「海外の市民活動」No.43、1986年11月。

5月に渡米した海外市民活動情報センターの野村かつ子さんの報告集でニューヨークで開かれた国際消費者機構(IOCUC)セミナーの報告を中心に編集。野村さんが訪ね歩いた米国の「不死鳥」の市民運動シテイズン・アクション、フード・ファ

ースト、ストップ照射食品全国連合の紹介、さらにチーズボード、ブルーマンゴー・コープ・レストラン、レインボー等のワーカーズ・コレクティブの紹介もある。

IOCUCセミナーのテーマは2000年に向けた消費者政策で、前年の85年4月に国連で採択された「消費者保護ガイドライン」(全訳収録)を地球規模でどう定着させていくかが議論の中心だった。参加者は世界35カ国から150人、中国からも84年に設立された中国消費者協会の代表が参加した。セミナー最終日には「消費者2000年宣言」が採択され、特に多国籍企業の進出で問題の多い第三世界の消費者保護が強調された。(M)

●世界を読むキーワード2、世界臨時増刊、岩波書店、1987年1月。

社会の「いま」をつかまえるためライフスタイルに関わるキーワード146を選び出し、それを家族、学校、労働、こころ、あそびの5領域に分類して各々2~4頁で解説する新しい辞書の試み。「キーワード1」(国際問題)に続くもの。

キーワードは各々独立しているが各領域で一つのメッセージになるように構成されているので関連問題を考えるのに便利である。

キーワードを列挙すると家族では核家族、ライフスタイル、家計、ウサギ小屋、ホテル家族、離婚、単親家族、専業主婦、家事産業、主夫、コハビテーション(同棲)、非婚の母、シングル、父性・母性、育児の社会化、親喪失、母子密着、家庭内暴力、家族療法、三世同居、老人施設、在宅ケア、武蔵野方式、家族と社会、混合家族。学校では学校化、40人学級、学力、国・公・私立、学

区、教科書、教育委員会、高校入試、評価、内申書、生活科、体罰、校則、いじめ、非行、自殺、登校拒否、給食、卒業、塾、部活、教員の養成・採用、PTA、臨教審、大学の入試改革、障害児教育、家庭科、性教育、開発教育、死の教育、フリースクール。こころの領域ではアイデンティティ、気分の病、熟年自殺、ボーダーライン、不安と逃走、大人の病、きらい好き、コンピュータ・ストレス、ドラッグ、キッチン・ドリinker、金妻からフリンへ、恋愛技術、二次元の恋人、ファッション・ホテル、男の化粧、とりかえばや症候群、フィットネス、体と姿勢、変体女性文字、グルメ、劣等感覚、長電話、睡眠、朝の発見、超能力・瞑想、生き神様。あそびでは遊び場、

「時間割」のなかで、動物がいない、ファミコン、子どもとテレビ、やりたい仕事、おこづかい、疲れちゃうよ、おしゃれ、デート一回五万円、並んでグルメ、パンチパーマ、原宿、追っかけ、VIDEO LIFE、自動車が好き、暴走しない青春、愛のかたち、セックス産業、買春観光、中間キャンブラー、ゴルフとカラオケ、ごろ寝の実態、ループタイ、野球チームと商店街、「とにかく外に…」、「自分」ということ、カルチャースクール、テニスクラブ、ひまなんかない、旅する老人たち、ゲートボール、俳句、ひまつぶし、病院のサロン化、同期の桜、余生でない人生、ポッとする、おもしろい。この他に労働の領域で26項目ある。

テレビに関して1項目しかないのが気になるが、よく読むと随所にテレビとの関連を示唆する記述がみえ、本書を「テレビのいまをつかまえる」ためのキーワードに組み換えて読むこともできそうだ。(M)